

気仙沼市東日本大震災遺構検討会議  
報告書

平成 27 年 3 月

気仙沼市東日本大震災遺構検討会議

## 目 次

1. はじめに	-----	1
2. 検討会議の検討結果	-----	2
(1) 震災遺構保存整備の意義	-----	2
(2) 保存整備の基本方針	-----	3
(3) 公開活用の基本方針	-----	4
(4) 公開活用における機能	-----	5
(5) 防災・減災教育の取り組み	-----	6
(6) 管理運営のあり方	-----	8
(7) 地域における拠点・施設の役割・連携のあり方	-----	9
3. 今後の課題	-----	10

## 1. はじめに

東日本大震災において甚大な被害を受けた気仙沼市では、平成 25 年度に気仙沼市東日本大震災伝承検討会議を設置し、震災の記憶と教訓をいかに後世へまた全国・全世界の方へ伝えていくか、その基本的な考え方を取り纏めた。

一方、国においては平成 25 年 11 月に復興交付金を活用した震災遺構の保存方針を定め公表した。

このことから、気仙沼市では震災伝承検討会議の報告を踏まえ、復興交付金を活用して整備する対象候補を「旧気仙沼向洋高校」とし、保存の是非、及び具体的な公開活用のあり方についての方針を検討することを目的として、平成 26 年 9 月、気仙沼市東日本大震災遺構検討会議（以下、「検討会議」という。）を設置した。

検討会議では、被災当時の状況を残す「旧気仙沼向洋高校」をどのようなものとして位置づけ、未来に活かしていくか、保存に関する調査結果、複数のシミュレーション案に基づく協議や災害遺構先進地の視察等も交えながら、基本的なあり方について検討を行った。

結果、「旧気仙沼向洋高校」はその公開活用を通して、東日本大震災の記憶と教訓を未来へ、そして今後同様の災害の恐れのある全国・全世界の人々へ伝えるための防災・減災教育の拠点として保存することが望ましいとの方針に至った。

ここに、これまでの検討結果を示す。

<検討会議の方針>

**旧気仙沼向洋高校は保存し活用すべき**

## 2. 検討会議の検討結果

### (1) 震災遺構保存整備の意義

前年度にまとめられた「気仙沼市東日本大震災伝承検討会議報告書」をふまえ、検討を行った結果、震災遺構保存整備の意義として、下記の事項を重視するものとする。

#### ■ 震災遺構保存整備の意義

##### 東日本大震災の記憶や教訓を伝承する場

- ・東日本大震災の記憶や教訓を伝承するうえで、被災した場所に被災した構造物等が存在することは、海との地理的な位置関係を含め、それを見る者の五感に直接訴えるものであり、その効果は大きい。
- ・「旧気仙沼向洋高校」は、4年が経過する現在において、類例のない規模で被災の状況が残る施設であり、東日本大震災の記憶と教訓を伝える重要なシンボルとなる。

##### 防災・減災教育の拠点

- ・度々津波に襲われ、多くの被害を被ってきた歴史事実があるものの、東日本大震災においては、再び多くの犠牲を出した。自然の中に生きる人類が、今後とも同じような悲しみを味わうことがないように、1人ひとりが自然に対しての畏怖畏敬の念を持ち、身を、家族を、まちを守る意識と取組みが重要となる。
- ・「旧気仙沼向洋高校」は、水産分野の教育が中心ではあったものの、海に関わる技術の習得のみならず豊かな人間性を育んできた教育機関であった。今後は、被災した実物に加え、展示、映像、教育プログラムを駆使し、訪れる人に防災・減災の大切さを訴え、自然と共に生きること、そして命の大切さを考えるきっかけを育む防災・減災教育の拠点となる。

##### 気仙沼の歴史や地域性を伝える場

- ・階上地区は、過去にも幾度となく津波の被害を受けてきた地区である。一方で、海からの大いなる恵みを得、人々の生活が営まれ、歴史を刻んできた地区でもあり、気仙沼の海と生業の関わりを表現できる代表的な地である。
- ・「旧気仙沼向洋高校」が立地するところは、地域とともに、また、時代に合わせ役割を担ってきた場所であり、海と生きてきた気仙沼の歴史と地域性を広く伝える場となる。

## (2) 保存整備の基本方針

震災遺構保存整備の意義をふまえ、「旧気仙沼向洋高校」の保存のあり方について検討した結果、下記の事項を基本方針とすることとした。

保存整備の具体化を図る際には、これらの基本方針をふまえ、その実現につながることを重視するものとする。

### <保存整備そのものについて>

- 東日本大震災の記憶と教訓の伝承と防災・減災教育の中核拠点として保存する。
  - ・将来にわたり東日本大震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として保存整備を行う。
  - ・全国に向けて東日本大震災の記憶や教訓を伝えていく拠点として、保存整備を行う。
  - ・気仙沼における防災・減災教育の重要な中核拠点として、保存整備を行う。

### <保存整備のあり方について>

- 震災遺構の特性を活かし、内部の公開活用を前提とする保存を行う。
  - ・複数の建築物が残存し、構造的に内部に入ることが可能という他の事例に見られない特性を活かした公開活用を行うことを前提とした保存整備を行う。
- ありのままの姿を現状保存する。
  - ・本物であること、現場であることを活かした防災・減災教育に資するものとするため、ありのままの姿を伝えることを重視する。外観等について、崩落等を防ぐための処理を行うが、漂着物の固定、防錆処理等は行わず、現状保存とする。
- 震災遺構の価値が保たれる最大の範囲を現状保存する。
  - ・現状保存の範囲は、震災遺構としての価値が保たれ、また多くの人々にその価値を伝えることができる最大の範囲とする。
  - ・但し、その範囲の設定に関しては、将来的な維持のあり方をふまえ、十分な検討を行うことを前提とする。
- 過大な財政負担とならないよう総合的視点から方針決定を行う。
  - ・保存整備及び公開活用に関しては、将来において気仙沼市の過大な財政負担とならないよう、維持管理のあり方を十分に検討した上で総合的な視点に立って決定する。
- 安全性を重視した保存整備を行う。
  - ・震災遺構が伝えるべき事柄がより多くの人々に効果的に伝わるよう、安全性等に十分な配慮を行った上で、適切な範囲において内部を公開する。

### (3) 公開活用の基本方針

公開活用にあたっては、下記の事項を基本方針とする。

#### <公開活用そのものについて>

- 東日本大震災の記憶と教訓の伝承と防災・減災教育の中核として内部を公開し、活用につなげる。
  - ・将来にわたり東日本大震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として公開活用を行う。
  - ・全国に向けて東日本大震災の記憶や教訓の伝承に資する活用を図る。
  - ・気仙沼における防災・減災教育の重要な中核として、内部の一部公開を行い、防災・減災教育に資するものとして活用を図る。

#### <公開活用のあり方について>

- 東日本大震災の教訓と“海と生きる”気仙沼を伝える。
  - ・「旧気仙沼向洋高校」が伝えるものは、「地震」、「津波」の脅威のみならず、被災した人々の行動、記憶等も含めるものとする。また、東日本大震災だけでなく“海と生きる”気仙沼の歴史、地域性も含めて考える。
- 全国からの来訪者に生きた防災・減災教育のきっかけを与える。
  - ・全国から訪れる来訪者に対して、東日本大震災を通して得られたことを、自分たちに置き換えて考えることができるような防災・減災教育の拠点として意義のある活動を行う。
- 防災・減災教育及び展示等を展開する施設を整備する。
  - ・伝えるべき事柄が、より多くの人々に効果的に伝わるよう、わかりやすく可変性・更新性の高い展示、防災・減災教育プログラム等を企画・実施するため、記念館に相当する施設を設置する。
  - ・記念館相当施設の設置は、「旧気仙沼向洋高校」において被災による破壊が重篤でない北校舎の上層階の再利用、あるいは旧プロムナードの代替施設として、近接地における新規施設設置を検討する。
  - ・活用に向けた空間整備は、修学旅行や学校団体利用等を想定し、団体の受け入れを想定して行う。
- 大学等の研究機関と連携し、より効果的な活動を展開する。
  - ・気仙沼は大学等の研究フィールドであることから、発展的に事業を展開するため、研究機関等との連携を図る。
- 避難計画策定に基づく公開活用とする。
  - ・公開活用は、階上地区の避難計画等をふまえた避難経路、方針等を定め、事前の周知、情報発信に努める。
  - ・「旧気仙沼向洋高校」は避難ビルとは位置づけず、周辺の避難場所への迅速な避難を前提とした計画を定める。
- 事業の継続性を重視する。
  - ・「旧気仙沼向洋高校」の公開活用は、地域の復興において重要な意味を持つ。将来的に事業が継続されるよう、有料化を図るとともに、地域と連携を図りながら推進することが重要である。

## (4) 公開活用における機能

「旧気仙沼向洋高校」の公開活用について、具体的に求められる機能の検討を行った。その結果、下記に示す機能が重要であるとの方針に至った。

なお、「利用者サービス」における「飲食・物販」について、震災遺構として望ましいあり方の位置づけは今後の検討課題である。

### <公開活用における機能（記憶・教訓の伝承と防災・減災教育）>

#### ●遺構公開

[震災遺構公開] 遺構の保存と内部の公開。

#### ●活用

[教育・普及] 東日本大震災の記憶と教訓を伝える防災・減災教育の拠点。自然と共に生きること、そして命の大切さを考えるきっかけを育む防災・減災教育の拠点。

[展示] 震災遺構を補完し、伝えるべき情報をわかりやすく伝える、防災・減災教育に資する展示。

[調査・研究] 大学等と連携した地震・津波に関する最新の研究成果の事業企画の反映、防災・減災教育に関する最新の研究成果の事業への反映。

[地域連携] 防災・減災教育の拠点として、地域の復興の取り組みとの連携。

[利用者サービス] 休憩スペース、飲食・物販、トイレ等、快適な滞在を促進するための機能整備。

#### ●運営・管理

[運営・管理] 諸方針を具現化するための運営及び管理。

## (5) 防災・減災教育の取り組み

震災遺構の保存整備及び公開活用の基本方針をふまえると、諸機能のうち最も重視すべきものは教育・普及、すなわち防災・減災教育である。

「旧気仙沼向洋高校」において展開できる防災・減災教育について検討会議で協議した結果、下記の考え方を重視し、積極的な展開を図ることが望ましいとの方針に至った。

### <防災・減災教育のテーマ>

- 東日本大震災の悲劇と教訓を伝える。
- 自然災害に対する危機意識や防災意識を醸成する。
- 「海と生きる」気仙沼についての理解を深める。

### <旧気仙沼向洋高校における防災・減災教育とは>

- 震災遺構の“ありのままの姿”を核とする活動。
  - ・ 震災遺構として伝えられる“ありのままの姿”を核として、教育・普及プログラムや展示等により展開する。
- 「本物」、そして「生」の情報の伝達。
  - ・ 教育・普及は、語り部等による「生」の情報の伝達を重視する。
  - ・ 展示は、当日の映像や漂着物等、「本物」の情報や資料を中心に行う。地震・津波に関する基本的な事柄、防災・減災に関する情報を、わかりやすく柔軟に紹介するため、更新性・可変性の高い展示とする。

### <主たる対象>

- 次世代を担う子どもたちの受け入れを重視する。
  - ・ 次世代に東日本大震災の記憶と教訓を伝えることを重視し、子どもたち（修学旅行、学校団体見学等）を主たる対象として位置づける。特に気仙沼市内の学校に関しては十分な活用が図られるようにする。
- 教育旅行・復興視察の受け入れを重視する。
  - ・ 気仙沼における防災・減災の取り組み、復興のあり方等について、広く他の地域に資するものとするため、他の自治体や企業、団体等の教育旅行、復興視察の受け入れも重視する。
- 市民や観光客への対応を重視する。
  - ・ 震災遺構の公開（解説パネル、語り部によるガイド等）、展示により、わかりやすく防災・減災の情報が伝えられるようにする。



**<重視する視点>**

- [体感する] 震災遺構の姿を通して「震災とはいかなるものか」を体感し、関心の喚起とともに記憶の風化を防ぐ。
- [知る] 残される記憶・記録を通して東日本大震災の事実を知るとともに、「次の震災」に向けて知るべき知識を得る。
- [考える] 来館者がそれぞれに「もしものとき」のために何をすべきかを考える。
- [身につける] 気仙沼で知り、考えたことを各地域に持ち帰ってどのように身に着けるか、具体的なアクションとして考える。

## (6) 管理運営のあり方

「旧気仙沼向洋高校」の保存と公開活用に関する運営計画のあり方として、下記に示す事項を重視する。

### <運営計画において重視すること>

#### ●事業の継続性を重視する

- ・保存整備、公開活用の基本方針の具現化が、持続的・発展的に図られるよう、事業の継続性の確保に努める。
- ・市の財源のほか、公開活用の有料化等を図り、自主財源の確保に努める。

#### ●震災遺構を活かした防災・減災教育の展開を支える柔軟な連携体制を構築する

- ・東日本大震災の教訓を伝え、また“海と生きる”気仙沼の歴史や地域性等を伝えていくためには、地域住民をはじめ外部の有識者等と多様な連携体制を構築し、維持していく。
- ・限られた施設規模で団体の受け入れを促進するには、市内諸施設等との連携体制は不可欠であることから、柔軟な体制構築を図る。
- ・東日本大震災の記憶が風化し、感性が鈍化することがないように、常に感じる心、考える心を喚起させる教育プログラムの企画と実践、展示等の活動ができる体制を構築する。

#### ●気仙沼市の復興に寄与する活動を展開する運営体制を構築する

- ・「旧気仙沼向洋高校」は他に例のない規模を有する震災遺構であり、また積極的な防災・減災教育を展開することで、全国、また海外からも多くの人々が来訪することが期待される。
- ・これらの来訪者に対して、“海と生きる”気仙沼の魅力を感じてもらおうよう、周辺地域、市内諸施設等と情報共有、PRの連携等を図り、気仙沼市の復興支援に寄与していく。

## (7) 地域における拠点・施設の役割（位置づけ）・連携のあり方

「旧気仙沼向洋高校」を防災・減災教育の拠点、そして地域活性化に寄与する地域資源として活用していくためには、周辺地域及び気仙沼市内内外の様々な施設等との連携が必須である。

現時点において想定できる、地域における拠点・施設の役割（位置づけ）と連携のあり方として考えられるものは下記に示す通りである。

### <市内外震災関連施設等との連携による防災・減災教育の展開>

- 市内小中高生を対象とした防災・減災教育への遺構活用の取り込み
  - ・市内小中高校生を対象とした防災・減災教育の場として活用し、東日本大震災の実態と気仙沼の震災の歴史、先人の災害への対応・取り組みの姿を学ぶ。
- 市外からの修学旅行を対象とした防災・減災教育への活用
  - ・修学旅行をターゲットとして、他都市の震災遺構との回遊を視野に入れながら、「旧気仙沼向洋高校」での広域的な防災・減災教育と市内での各種体験、市内宿泊をパッケージ化することで特徴づけを行い、旅行先として選ばれるようにする。
- 自治体・企業の研修旅行・復興視察の拠点としての活用と市内震災関連施設等の回遊
  - ・自治体や地方議会による防災対策・復興事業の研修視察や、各種団体・企業等による研修旅行の受け入れ先として、「旧気仙沼向洋高校」が拠点となり市内各施設の回遊とあわせて気仙沼の震災の実態と復興の姿を学ぶ。
- 一般観光客を対象とした旧気仙沼向洋高校への誘導
  - ・海の市等の市内の主要観光施設を訪れた一般観光客に「旧気仙沼向洋高校」まで足を伸ばしていただき、震災について学び気仙沼市への理解を深めていただくとともに、階上地域の観光地にも誘導することで地域の活性化につなげる。

### <地域資源との連携による地域活性化の促進>

- 「旧気仙沼向洋高校」を拠点とした階上地区内の回遊
  - ・「旧気仙沼向洋高校」を拠点に周辺の地域資源を回遊しやすい仕組みをつくることで、地域の魅力を高め来訪者を増やす。地域との交流を生み出すことで、地域の活性化につなげる。

### 3. 今後の課題

計 6 回にわたる検討会議においては、保存整備と公開活用の基本方針、防災・減災教育拠点としての基本方針のほか、管理運営のあり方、周辺施設との連携や地域における役割等について、基本的な考え方をまとめた。

しかしながら、具体化に向けては今後さらなる協議・検討を継続して実施する必要がある。

検討会議において示された今後の主な課題は下記の通りである。

#### ＜事業を進めるにあたっての今後の課題＞

- 震災遺構の保存整備事業を進めるにあたって、事業の運営体制、運営方法について検討を行う会議体の設置
- 収支計画を伴う具体的な事業計画の検討
- 防災・減災教育実現にあたってのプログラム作成や実施体制の構築
- 保存範囲、周辺の整備方法の明確化
- 他地域・他施設の類似施設との差別化が図れる公開活用の実施
- 地域としての遺構の役割と周辺観光資源との連携方法の具体化
- 広域での繋がり、市内の関連施設等との役割分担、連携の具体化

「気仙沼市東日本大震災遺構検討会議」委員名簿

順不同（敬称略）

氏 名	所 属	
川 島 秀 一	市震災伝承検討会議・代表	東北大学災害科学国際研究所・教授 (学識経験者・民俗)
木 村 拓 郎	3.11 震災伝承研究会 県震災遺構有識者会議 市震災伝承検討会議	一般社団法人減災・復興支援機構・理事長 (学識経験者・工学博士・防災)
熊 谷 俊 輔	市震災伝承検討会議	気仙沼観光コンベンション協会・ 誘致推進課長 (観光)
山 内 宏 泰	市震災伝承検討会議	リアス・アーク美術館・学芸員 (美術)
渡 邊 眞 紀	市震災伝承検討会議	株式会社三陸新報社・専務取締役 (メディア)
及 川 芳 夫		階上地区まちづくり協議会 (まちづくり)
辻 隆 一		階上観光協会 (地域・観光)
近 藤 公 人		階上地区自治会長連絡協議会・会長 (地元歴史識者)
三 浦 博 之		防災担当主幹教諭・階上小 (防災教育)
川 名 一 彦	行政	副市長 (行政)
吉 田 信 一	行政	市危機管理監 (行政)
森 成 人	行政	震災復興支援チーム (行政) リアス観光創造プラットフォーム (観光プラン)